青年たちのタランテラ

志月ゆかり

◆登場人物（男２、女３、計５）

禎一（ていいち、男）／踊り手１

蘭（らん、女）／踊り手２

透真（とうま、男）／踊り手３

舞衣（まい、女）／踊り手４

紀子（きこ、女）／毒蜘蛛

【第一場】

雨垂れのようなピアノの音が一音ぽんと落ちる。
間を開けもう一音。
明転。
薄暗い舞台のあちこちに踊り手たちが佇んでいる。
踊り手Ｉは舞台中奥に直立。踊り手２、３、４は踊り手Ｉと比べ面寄りにばらけて座っている。めいめい視線の方向が異なる。
毒蜘蛛、舞台面に膝を抱えてうずくまり、俯き顔が見えない。
ピアノの音が落ちる。
踊り手たち、一人、また一人と、ピアノの音に反応して腕を上げ、首をもたげ、上半身だけでゆったりと踊り始める。
ピアノの音は、だんだんと音の羅列から旋律へと変わっていく。
揺らいでいないのは毒蜘蛛だけである。
踊り手２、３、４、旋律に合わせ足も使いはじめ、やがて立ち上がる。
踊り手たち、ゆっくりと中央に集まり、手を繋ぎ時計回りに回り始める。機械じみた歩みから、だんだんと幼子がかごめかごめで遊ぶような、軽妙な足取りへと変わっていく。きゃらきゃらと笑いながら。
毒蜘蛛に気づいた踊り手４、歩みを止める。

踊り手たち、はずみで歩みを止める。
踊り手４↓舞衣（五歳）、毒蜘蛛をまっすぐ指さす。
踊り手１↓禎一、踊り手２↓蘭、踊り手３↓透真（ともに五歳）、指さされた方を見て、毒蜘蛛↓紀子（五歳）に気づく。
禎一、蘭、透真、舞衣、手を繋いだまま紀子の方へ走り寄る。

舞衣　あーそーぼ。

紀子、びくりと肩を震わせる。

紀子　だめだよ。
透真　なんでー？
紀子　だめじゃないの？
蘭　だめじゃないよ。
紀子　いいの？
禎一、蘭、透真、舞衣　いいよ。

禎一、紀子の側に駆け寄り、手を差し伸べる。

禎一　きなよ。

紀子、顔を上げ、禎一たちを見る。

紀子　うん。

紀子、禎一の手を取り、五人で合流する。一列に手を繋ぎ、回りながら輪になり、ぐるぐると時計回りに回る。

紀子↓毒蜘蛛、突然歩みを止める。同時にピアノの旋律が止まる。

え？　と毒蜘蛛を見る子どもたち↓踊り手たち。

毒蜘蛛、おもむろに手を叩いてリズムを取る。先ほどまで聞こえていた旋律が、軽快なタランテラとなって戻ってくる。

踊り手たち、四方向に散らばりながらタランテラのステップを踏む。毒蜘蛛、拍子をとり続ける。

踊り手が疲れを見せると、毒蜘蛛が駆けて行って手拍子で囃す。囃されて持ち直す踊り手たち。

やがて、踊り手２、３、４、踊り続けながら退場していく。

踊り手ー、疲れて覚束ないステップで舞台中奥へ。

踊り手ー、立ち止まり、膝に手をついて息を整える。

毒蜘蛛、踊り手ーの両腕を掴み

毒蜘蛛　踊り続けないと。毒が抜けるまで。踊り続けて。死にたくなければ。

踊り手ー、毒蜘蛛を見る。疲れ切って座り込む。
毒蜘蛛、踊り手ーに向かってしきりに手を叩いている。
暗転。
軽快なタランテラが流れ続ける。

【第二場】

明転。
静かなリビング。初夏の夕暮れ。
格闘ゲームの音がやけにうるさく響いている。
禎一（二十歳）、ソファに座り、ゲームのコントローラーをガチャガチャ操作している。力が入っているのはコントローラーを操作する指のみであり、慣れ切った脱力感でソファにもたれかかって斜めにゲーム画面を見ている。

透真、鞄を雑に肩にかけ、背筋を曲げて玄関から入ってくる。

透真　ういー。
禎一　（視線を動かさず）ういおかえり。（顔を上げて透真を見る）あ？　バイトは？
透真　（ソファに鞄を投げ出し座る）キャンセルんなった。
禎一　なんで。
透真　宴会二つナシだってよ。
禎一　ふーん。（視線を画面に戻す）
透真　マジ最悪なんだけど。せめて前日に言えよ。稼げねえし遊び行けねえし。
禎一　お前なら誰かしら連絡したらいるだろ。

透真　いねえんだよそれが。全滅。
禎一　珍し。まあいんじゃね休みんなったと思えば。
透真　休みったってさあ。どうせ授業あるから休み感ねえわ。（禎一の手元をのぞき込み）お前それ指どうなってんだよ。きしょ。
禎一　うるせ。

間。禎一のゲーム音だけが響く。
透真、ポケットからスマホを取り出しいじる。
ゲームの勝利音。透真、ちらりと画面を見る。

透真　すげえじゃん。
禎一　おん。
透真　お前次俺らでゲームするとき右手禁止な。
禎一　無理すぎ。
透真　てかお前俺が家出る時からやってなかった？　どんだけやってんの？
禎一　あー……今何時？
透真　（スマホを見て）六時～……十八。
禎一　じゃあ八時間くらい。
透真　やばお前。飯食った？

禎一　カップ麺。

透真　安定。

禎一　四時くらいに。

透真　やばお前。今日夕飯誰だっけ？　お前？

禎一　紀子。

透真　あーじゃあ大丈夫だ。お前食えよ。

禎一　食うよ。

透真　あってかやべ。俺飯食わねえことになってるわ。メッセしよ。

透真、スマホを操作する。
禎一、ゲームを再開する。
紀子、スマホを見ながら玄関から入ってくる。腕に夕飯の材料が入ったマイバッグを提げている。

紀子　え～もっと早く言ってよ～あ～ただいま～透真くんもっと早く言って！

透真　しょうがねえじゃん今日急にバイトなくなったの！

禎一　おかえり。

紀子　禎一くんただいま！　まだゲームやってたの？

禎一　ん。

紀子　体に悪いよ～もう終わりね！

紀子、禎一の背後に歩み寄り、背もたれに手をかけ圧をかける。

禎一　これだけ。

紀子　これだけね！

間。

禎一　……え、見てんの。

紀子　終わるまで。禎一くんタ飯手伝って。

禎一　えー。

紀子　てーつーだって！

紀子、禎一の肩をがくがく揺らす。

禎一　やめてやめて。わかったから。ねえ。やめてって。

敗北音。

紀子、コントローラーを禎一の手から奪う。

紀子　終わりね。

禎一　……ん。

透真　紀子～今日女子は？　飯。

紀子　舞衣ちゃんはいるよ。蘭ちゃんは図書館だからいらないって。

透真　あいつずっとじゃん。すご。

禎一　昔からそうだろ蘭は。

透真　最近特にじゃん。俺全然あいつの顔見てないんだけど。

紀子　透真くんも蘭ちゃんも家にいないからだよ～。

禎一　片やバイトと遊びの鬼。片や就活準備の鬼。

紀子　真反対で面白いね。

透真　就活なー。マジで嫌。就活っつーか卒業が嫌。全員で八年生やろうぜ。

禎一　嫌すぎ。

紀子　五年でもないんだ。

透真　じゃあ別に就職してもいいから近場にして。頼むから。

禎一　それは知らん。

透真　知れ！

禎一　お前さ、だってそれはお前がシェアハウス解消したくないだけだろ。

透真　そう！

紀子　わかるよ～ずっと一緒にいたいよね～

禎一　それは面白すぎるじゃん。

紀子　え～？

禎一　透真が「みんなとずっと一緒にいた～い」なんて言うわけ。金だろ金。

透真　当たり前だろ何のためのシェアハウスだよ。解消なんかしたら家賃！　生活費！　引っ越し代！　どうすんだよ！

禎一　引っ越し代くらい貯めろよ。

透真　宵越しの金は持たない主義。

禎一　あればあるだけ使っちゃうだけだろ。そんだけ稼いでてよく使いきれるよお前。

透真　いくらあったって足りないだろ。

紀子　使いすぎだよ～。透真くん友達多いからな～。変な人についてっちゃだめだよ？

透真　変な人イズ誰。別に飲み行ったりカラオケ行ったりしてるだけだし。

紀子　「金運上がるよ～」って言われて高い壺とか絵とか買っちゃだめだよ？

透真　俺のことなんだと思ってるわけ？

禎一　はいはい紀子行くよ。

禎一、立ち上がり、ソファの裏に置いてあった紀子のマイバッグを持って上手に退場。

紀子　はーい。

紀子、禎一を追って上手に退場。
透真、二人を見送った後、テレビのリモコンを手に取り操作する。
ニュース番組、ドラマ、クイズ番組を経てトークバラエティの声に変わり、
透真、テレビの電源を切る。
透真、スマホを操作し、明るい洋楽を流す。そのままスマホを操作。
ややあって、舞衣、下手から登場。大学帰り、パソコン等の入った鞄を持っている。

舞衣　何その曲知らない。
透真　おー舞衣。おかえり。
舞衣　っていうか透真バイトじゃなかったっけ。
透真　キャンセル。
舞衣　ご愁傷様。
透真　マジでな。

舞衣　ねえそんなことよりさ、見て！

舞衣、透真の眼前に自分のスマホの画面を見せる。

透真　ちょ、近い近い見えない。……おお。フォロワー一万いったん。おめでと。

舞衣　ありがとー！　ほんとに嬉しい！　頑張っててよかったー！　次は十万目指すんだ！

透真　がんばれー。

舞衣　ねえもうちょっと心込めてよ。まああんたは興味ないだろうけど。

透真　それってフォロワー増えたら金とかもらえんの？

舞衣　そういうとこー！　金の亡者！　かわいくない！

透真　俺がかわいくなってどうすんだよ。お前のかわいい好きは女にしか適応されないやつじゃん。

舞衣　あんたとか禎一とかが昔から私の言うとおりにしてたらもっとかわいがれたかもしれないのに。

透真　圧倒的ノーサンキューです。

舞衣　はーあ。この家でかわいいのは紀子だけだよ。

透真　蘭も別に美人だろ。

舞衣　そうだけどー、蘭はかわいいとかじゃないじゃん。強すぎるじゃん。美しすぎ

て。中学とか高校のとき高嶺の花すぎて浮いてたじゃん。

透真　お前らよくその話してるけど、正直あんまわかんねえわ。

舞衣　あんたたちは女子に興味なさすぎんのよ。まああっても困るけど。相手してらんないし。

透真　こっちこそ願い下げだわ。お前らなんか。

舞衣　とか言ってー。結局うちらといるときしか素でいられないくせに。

透真　お前にだけは言われたくないんだけど。

紀子、上手から顔を出す。

紀子　あ！　舞衣ちゃんおかえり～！

舞衣　紀子～！　ただいま～！　今日もかわいいねえ！

舞衣、紀子を抱きしめわしゃわしゃと頭を撫でる。

紀子　舞衣ちゃん、髪崩れちゃうよ～。

透真　はー……わっかんねえなあ……。

舞衣　紀子はなんでこんなに天使なんだろうね？　夜なのに全然メイク崩れてないしってかそもそも肌きれいすぎ、羨ましすぎる、同じ生活してんのになんで？

紀子　え～？　えへへ。
透真　紀子はよく食べよく寝てるからだろ。ＳＮＳ中毒夜更かし女とは違うんだよ。
舞衣　きも。あんたに何がわかんの？
紀子　舞衣ちゃ～ん、きもいとか言っちゃだめだよ～。透真くんはきもくないよ～。
舞衣　紀子はほんと天使だねえかわいいねえ。
紀子　えへへ～。あっ！　そうだ、違うの。今日ね、デザートほしいなって思ってアイス買ってきたんだけど、チョコとバニラと抹茶どれがいい？　って聞こうと思って
舞衣　えー嬉しー！　私抹茶がいい！
透真　チョコで。
紀子　はーい。
舞衣　今夕飯作ってんの？　手伝おっか？
紀子　いいの～？　今ね、禎一くんと唐揚げ作ってるの！
舞衣　えっ、禎一いんの？
紀子　いるよ～。
舞衣　あー、えーっと、うわーそーういえば私今日までのレポートあったわー。ごめんけどそっちやんなきゃー。ごめんねー。じゃあ二人で、ごゆっくりー。全然ゆっくりでいいからねー。

舞衣、わざとらしく腕を振りながら上手に退場。
透真、首をかしげる。

透真　何あいつ、禎一と喧嘩でもしたの？
紀子　あ～、ううん、たぶん気を遣ってくれたんだと思う。別にいいのに。優しいね。
透真　気を遣うって何が？
紀子　私が禎一くんのこと好きだからさ～。
透真　……あ？　はぁ！？

透真、ガタガタッと騒々しく立ち上がる。
紀子、焦ったように両手を振る。

紀子　大丈夫だよ透真くん、別に付き合おうとか告白しようとか思ってないから。関係拗れてシェアハウス解消とかにはならないから、安心して。
透真　……いや、まあ、おん……それは、まあ、いいんだけど……全然知らなかったんだけど。マジで？　あいつの何がいいの？
紀子　何って、え～、あはは。
透真　……紀子さあ、俺たちとシェアハウスしようって言ったの、禎一と一緒に住み

たいから？

紀子　違うよ～。みんなと一緒にいたかったからだよ。

透真　……そっか。

上手の向こうのキッチンから、禎一が紀子を呼ぶ声がする。

禎一　紀子ー。衣つけんのやってー。

紀子　あっ、ごめんね！　今行くね！　（透真に）じゃあもうちょっと待っててね～。

紀子、パタパタと上手に走っていく。

透真　……おう……。（首を傾げつつ座る）わからんなあ……。

ピンポーン、とインターホンの音が響く。

透真　っと……なんだ？

透真、下手に退場。

遅れて、舞衣、急いだ様子で上手から駆け込んでくる。玄関の方を見て

舞衣　あー、それ、私かも。

透真、大きな段ボール箱を両手で抱えて登場。その辺の床に置く。

透真　舞衣の？　でっかこれ。何これ。

舞衣　色々ー。

透真　だからその色々が何かって聞いてんだよ。

舞衣　色々は色々だよ。どうせ言ったってわかんないじゃん。

透真　買ったん？

舞衣　そうだけど？

透真　いいなーお前こんなでかい何かぽんと買える金あんのかよ。俺の分の家賃払ってくれれん？

舞衣　「ぽんと」じゃないし払わない。

舞衣、透真から荷物を守るようにして、しっしっと手で追い払う。

透真　へいへい。知ってた。

透真、上手に立ち去りかけ

透真　あーそういやさ。

舞衣　何？

透真　紀子って禎一のこと好きなのマジ？

舞衣　ばっ、声が大きい！　ばか！

透真　おーんマジなんだ。知らんかった全然。

舞衣　紀子は言う気ないんだってさ。言えばいいのにね。どうせ禎一だって紀子のこと好きだよ多分。

透真　……そーうかー？

舞衣　あんたはそういうの興味ないんでしょ、どうせ。

透真　まあ、恋愛とかダリィなってのが最初に来るけど。

舞衣　そんなあんたにわかるわけないのよ、そういうの。

透真　（キッチンの様子をうかがいながら）それはー、まあ、そうな？

舞衣　だから二人の邪魔しないでやってよね。

透真　別にいいけど……。シェアハウス解消して同棲とか、夜な夜なうるさくなるとかは勘弁願いたいわ。

舞衣　最低。

舞衣、透真の肩をバシバシ叩く。

透真　うっせ。いって。ばーか。

舞衣　あんたの方がよっぽどだし！

紀子　（上手から顔を出して）どうしたの？

透真、舞衣　何でもない！

紀子　喧嘩しないでねー。（上手にはけていく）

禎一、上手から登場して下手に向かっていく。

舞衣　あれ、どうしたの。

禎一　ちょっとコンビニ。

舞衣　今！？

禎一　しょうがねえじゃんマヨとレモン汁切れてた。

紀子　（声のみ飛ばして）ごめーん！

禎一　じゃ。

禎一、下手にはけていく。

少しの沈黙。

舞衣、透真、顔を見合わせる。
舞衣、透真、どちらからともなく上手に向かい

透真　紀子ー。
舞衣　手伝うー？
紀子　（声のみ飛ばして）ありがとー。

透真、紀子、退場。

【第三場】

数時間後。
舞衣、ソファに座って、先ほど届いた荷物を広げている。
玄関扉の開閉音が聞こえ、ややあって蘭が下手から登場。資料や参考書、パソコン等が入った重そうな鞄を持っている。
舞衣、蘭の方を振り向く。

舞衣　おかえり。
蘭　……まだ起きてたの。
舞衣　ちょっとね。
蘭　何、それ。
舞衣　服とか化粧品とか三脚とか色々。
蘭　部屋でやればいいのに。
舞衣　そうだけどさ。わかんないかな。
蘭　何が？
舞衣　待ってたの。最近顔見てなかったからさ、蘭の。
蘭　……夜更かしは美容の大敵なんじゃないの。
舞衣　その顔で言われてもねー。今日も最高に美人だね。

蘭　知らない。

舞衣、立ち上がり、部屋の隅に置かれた電気ケトルの方へ。

舞衣　なんか飲む？　コーヒー以外ね。夜遅いし。

蘭　……別にいらない。

蘭、足早に舞台上を横切り上手へ退場しようとする。

舞衣　ねえ、ちょっと話そうよ、蘭。

蘭、足を止めて振り返る。

蘭　何気取り？

舞衣　何も気取ってないよ。ちょっとだけ。夜遅いし。

蘭　……はあ。わかったわよ。

舞衣　お茶でいい？

蘭、ソファに座って荷物を床に置きながら

蘭　いらない。
舞衣　……はーい。

舞衣、蘭の隣に座る。
少しの沈黙。

舞衣　……元気してた？
蘭　元気よ。あなたも元気そうね。
舞衣　元気だよ、みんな。
蘭　そう。
舞衣　勉強、順調？
蘭　まあね。
舞衣　今は何取ろうとしてるの？
蘭　とりあえず秘書検。簿記とＩＴは取れたから。あとＴＯＥＩＣも受ける。
舞衣　あれ？　前受けてなかった？
蘭　９００点取りたいから。
舞衣　すごいね。
蘭　インターンの試験とかもあるし。課題もね。

舞衣　……ねえ、蘭。ちょっとさ、頑張りすぎなんじゃない？

蘭　そんなことないけど。

舞衣　でもさ、そんな毎日毎日朝から晩まで勉強漬けだと絶対疲れるよ。たまにはさ、気分転換とか、した方がいいんじゃない？

蘭　いらない。私がコツコツやるの得意って知ってるでしょ。

舞衣　そりゃね。蘭は昔からそうだけどさ。私たちがみんな今の大学入れたの、大体は蘭のおかげ。私たちの学力底上げしてくれたもんね。自分の勉強もあるのにさ。

蘭　あなたたちみんな計画性なさすぎなのよ。社会人になるのなんてあっという間なんだから。ちゃんと考えてる？　準備してる？

舞衣　してるよー、私は。ＳＮＳやってるのだってその一環だよ。

蘭　……まあ、あんたは要領いいしあんまり心配してないけど。問題は残りよ。透真は今しか生きてないし、禎一は適当だし、紀子も何考えてるんだか。

舞衣　あはは。それぞれ何かしら考えてるよ。

蘭　どうだか。……私、絶対妥協したくないの。どういうところに就職するかでその後の人生何十年も全部決まるのよ。もう面倒なトラブルは絶対にごめんなの。まともな人しかいないところに行かないと。可能な限りレベル高いところに行かないと。私の能力だけをちゃんと評価してくれるところに。……私、みんなほど能天気でも、みんなほど生きるのうまくもないから。

舞衣　蘭は人の運がないよねー、昔から。別に蘭が百パーセント悪いわけではないと思うけどさ。

蘭　まるで何パーセントかは私が悪いみたいな言い方しないでくれる？

舞衣　蘭は誤解されがちだからさー。言葉強いから。嘘つかないのはいいことだけど、つかなすぎるのも考えものだよ？　興味ない人に冷たすぎるんだよ。だから「高嶺の花」とか茶化されるんだよ。

蘭　別に望んでこの顔に生まれたわけじゃないんだけど。勝手に評価して勝手に期待して勝手に失望して、私の知ったことじゃないわ。

舞衣　そういうとこだよー。絡まれたり、面白がって冗談半分に告白されたり、ストーカーされたり恨まれたりするのはさあ。

蘭　悪いのは絡んだりストーカーしたりする方でしょ。何事もする方が絶対的に悪いの。

舞衣　基本はそうだけどね。原因はあるよって話。って、違うよ、そんな話がしたかったんじゃないの。たまにはさ、遊びに行こうよ。二人でも、紀子と三人でも、あいつら入れて五人でもいいからさ。構ってくれないと寂しいよ。

蘭　子どもじゃないんだから。

舞衣　でも子どもの頃からずっと一緒じゃん。みんな気にしてるよ。蘭のこと。

蘭　……舞衣の狙いはわかってる。

舞衣　え？

蘭　私と２ショット撮ってＳＮＳに上げたいんでしょ。
舞衣　それだけじゃないよー。一緒にご飯食べ行ったり服見に行ったり映画観に行ったりしようよ。おすすめいっぱいあるんだよ。絶対気に入る自信あるからさ。ね。
蘭　……はあ。いいけどね。写真上げるなら私の顔は絶対隠してよ。
舞衣　えー！　目は！？
蘭　声が大きい。目なんか一番隠して。
舞衣　せっかく美人なのにー。もったいなーい。
蘭　興味ないの。変なことして就職先に悪く取られたくないし。
舞衣　変じゃないよー。友達と遊んだとか、おいしいごはん食べたとか、変でもなんでもないでしょー。
蘭　……もういいでしょ。お風呂入らなきゃ。

蘭、鞄を持って立ち上がる。

蘭　舞衣ももう寝なさい。肌荒れるわよ。
舞衣　もー。そういうこと言っておけばいいと思ってー。絶対遊び行こうね？　いつがいい？　明日？　明後日？
蘭　……今度の日曜日。

舞衣　約束だよ？　絶対だよ？　家にいてね？
蘭　わかったから。おやすみ。
舞衣　おやすみ！

蘭、上手に立ち去ろうとする。
禎一、上手から登場。蘭とばったり遭遇。

禎一　……あ。おかえり。
蘭　ただいま。何してんの？
禎一　……。
舞衣　まさかまたゲームじゃないよね？　今日ずっとやってたんでしょ。
禎一　……便所だし。
舞衣　お風呂場の隣の方が近いじゃん。紀子に怒られるよ。
禎一　なんで紀子が怒るんだよ。お前の方が怒るじゃん。
蘭　あなた明日二限あるでしょ。サボる気じゃないでしょうね。
禎一　俺ショートスリーパーだからいける。
蘭　馬鹿言ってないで寝なさい。何がショートスリーパーよこの居眠り常習犯。
禎一　へいへい。……蘭お前、よく飽きもせず続けるよな。
蘭　何？　喧嘩売ってるの？

禎一　違うって。根詰めすぎて途中でバテんなよって話。手当たり次第に資格取っても必ずしも将来に繋がるわけじゃないから。何のためにそんな頑張ってんのか、見失うなよ。

蘭　そんな馬鹿なことするわけないじゃない。私はちゃんと将来見据えてやってんの。

禎一　俺には将来に向けて勉強すること自体が目的になってるように見えるけど。

蘭　やっぱり喧嘩売ってるわね。

禎一　だから違うって。……ごめん。ちょっと思うところがあって。

舞衣　何が？

禎一　いい。おやすみ。

禎一、蘭と舞衣とすれ違ってソファの方へ向かおうとする。

蘭、禎一の服の襟をガッと力任せにつかむ。

禎一　ぐえ。

蘭　あんたもこっち。

禎一　……へいへい。

蘭、禎一、舞衣、上手へ退場。

【第四場】

雨垂れのようなピアノの音が一音ぽんと落ちる。
間を開けずにもう一音。
ピアノの音は急速にタランテラの旋律を奏で始める。
踊り手１、２、３、４、毒蜘蛛、一人、また一人と踊りながら登場。
誰からともなく舞台中央に集まり、輪になりタランテラのステップを踏む。
毒蜘蛛、きゃらきゃらと笑っている。
踊り手たち、だんだんと息が切れてくる。

毒蜘蛛　踊って、踊って、回って、回って、ステップ、ステップ。繰り返し、繰り返し。

踊り手１　ゲーム。
踊り手２　勉強。
踊り手３　バイト。
踊り手４　写真。
踊り手１　ゲーム。
踊り手２　勉強。
踊り手３　バイト。

踊り手4　写真。

毒蜘蛛　毎日、毎日。繰り返し、繰り返し。踊って。踊って。楽しいね、楽しいね。

踊り手1　ゲーム。

踊り手2　勉強。

踊り手3　バイト。

踊り手4　写真。

踊り手1　ゲーム。

踊り手2　勉強。

踊り手3　バイト。

踊り手4　写真。

毒蜘蛛　もっと、もっと、もっと、もっと。踊って、踊って、踊り続けて。楽しいから踊って、死なないために踊って。ずっと、ずっと、一緒に、一緒に。

踊り手1　踊って。

踊り手2　踊って。

踊り手3　踊って。

踊り手4　踊って。

踊り手1　踊って。

踊り手2　踊って。

踊り手3　踊って。

踊り手4　踊って。
踊り手1　……。
踊り手2　踊って。
踊り手3　踊って。
踊り手4　踊って。
踊り手2　踊って。
踊り手3　踊って。
踊り手4　踊って。
踊り手2　踊って。
踊り手3　踊って。
踊り手4　踊って。

踊り手1、動きが緩慢になる。
毒蜘蛛、踊り手1の腕をつかむ。

毒蜘蛛　踊って。
踊り手1　……なんで？
毒蜘蛛　踊り続けないと。毒を抜くために。踊り続けて。死にたくなければ。楽しいでしょ？　幸せでしょ？

踊り手１　……幸せ？
毒蜘蛛、踊り手３　楽しいでしょ？
踊り手２、踊り手４　幸せでしょ？

踊り手１→禎一、立ち止まる。

禎一　……このまま、同じことの繰り返しで、本当に幸せか？　幸せって、何だ？
毒蜘蛛　踊り続けないと。毒を抜くために。踊り続けて。死にたくなければ。
禎一　毒……？

毒蜘蛛、禎一→踊り手１の手を引き、輪の中に引き戻す。
毒蜘蛛、踊り手たち、手を繋いで、ぐるぐると回る。
毒蜘蛛→紀子（六歳）、足を止める。
踊り手たち→禎一、蘭、透真、舞衣（ともに六歳）、つられて足を止める。

舞衣　どうしたの？　きこちゃん。
紀子　……わたし、ほんとうにいいのかな。ここにいて、いいのかな。
蘭　またそのはなし？
透真　いいにきまってるじゃん！

舞衣　だれかになにかいわれたの？

紀子　……ううん。でも、こわい。

禎一　ぼくたちが？

紀子　ううん。みんなといっしょにいれて、すっごくうれしいの。でもね、またひとりになっちゃうのが、こわいの。

禎一　ならないよ。

舞衣　いっしょにいるよ！

紀子　でも……だって……

透真　がっこういっても、がっこうおわっても、いっしょにあそぼうね。

紀子　……ほんとにいっしょにいてくれる？　どっかいったりしない？

蘭　しないよ。

紀子　……ありがとう。……かえりたくないなあ……。

暗転。

紀子　帰ったら、ひとりになっちゃうから。帰っても、一緒にいられたらいいのに。ずっと、ずっと、ずっと……。

【第五場】

明転。

禎一、透真、紀子、リビングのテーブルを囲んで、各々パソコンと向き合っている。

透真　っあー。マジ無理。ダルい。

禎一　脱落が早すぎる。お前が言い出したんだろ。

透真　だってさあ。就活準備とかマジ地雷なんだが。

禎一　意味がわからん。就活準備が地雷って何だよ。むしろお前はいいとこ就職してバリバリ稼ぐべきだろ。知らんけど。

透真　それはそう。マジでそう。死。終わり。

禎一　終わるな。

紀子　透真くん、バイトなんでもできるから、お仕事もなんでもできそうだけどなあ。

透真　それとこれとは別っていうかー。もう俺フリーターなろうかな。

禎一　やめとけ、やめとけ。お前老後に備えて自分で貯金とかできるわけないんだから。大人しく正社員なって社会保険料とかしっかり納めとけ。天引きされとけ。

透真　うえー。大人ワード嫌すぎ。
禎一　大人だろうが。成人済み俺ら。
透真　マジで無理。大人アレルギー。
紀子　ずっと子どもでいられたらよかったのにね～。
禎一　そんなの無理だってわかりきってるだろ。
透真　っていうか、余裕ぶっこいてるけど、お前が一番社会への適正低いから。
禎一　はあ？
透真　めんどくさがり。適当。ゲーム中毒。
紀子　禎一くんはいつもやることはやってるから大丈夫だよ～。
禎一　こう見えて単位いっこも落としてないから俺。
透真　意味わからん……居眠りとサボりの常習犯のくせに……。
禎一、紀子　やることやってるから。
透真　それはやることやってるとは言わん。紀子は禎一に甘すぎ。
禎一　紀子はみんなに甘いだろ。
紀子　え～？
禎一　紀子はどうすんの。就職。自分の話全然しないけど。
紀子　ん～。あんまりこだわりないなあ。このへんで就職したいなって思ってるけど。みんなと一緒にいたいし。
禎一　紀子がここにいてもみんながここにいるとは限らないじゃん。

透真　いや、絶対に許さない。絶対にここにいてもらう。

禎一　無理だろ。蘭とか絶対東京出るよ。もっと言えば海外とか狙ってるよあいつは。

透真　あいつー。そんなに俺らが嫌いかよ。

禎一　そういう話じゃないだろ。

紀子　蘭ちゃん、一緒にいてくれないんだな～……。

禎一　そりゃ、色々あるだろ、みんな。

紀子　（ぼそりと）約束したのに……。

透真　え？　なんて？

紀子　私は透真くんとみんなとシェアハウス続けたいなあ。私が言い出したことだし。みんな一緒に住むって言ってくれて嬉しかった。

透真　俺にとっては得しかないし。絶対実家出たかったけど、生活費確実にキツイから。

紀子　禎一くんも、ありがとね。

禎一　まあ……。俺たちずっと一緒にいるのが当たり前だったし。昔から。

紀子　ね～！

透真　……。

透真、禎一と紀子の顔を見比べる。

禎一　何？

透真　やー……。ちょっと、思い出して。

禎一　何を？

透真　そういえば、そういえばだったなーって……。

禎一　だから何が。

透真、閉じたパソコンを抱えて立ち上がる。

透真　俺もうバイト行く準備しねえと。あとはお前ら二人でやって。飽きた。

禎一　はあ？

透真、ひらひらと片手を振りつつ上手に去る。

禎一　なんだあいつ……？

紀子　（抑えきれなくなったように）っふふふ。透真くんって面白いよね。

禎一　今どこに面白さ見出した？

紀子　内緒。

禎一　ええ……？

唐突に禎一のスマホの通知音が鳴る。
禎一、スマホを見る。
禎一、そのまま短くスマホを操作して仕舞う。
紀子、その様子をじっと眺め、禎一の動作が一段落した頃に声を上げる。

紀子　ねえ、禎一くんはさ、進路どうするの？
禎一　んー……。営業以外。
紀子　つまりノープランなんだ。
禎一　ちょこちょこ見てはいるけどさ。説明会とか。
紀子　禎一くん、ゲーム好きだし、ゲーム会社とか行かないの？
禎一　別に仕事にしたいとかではないし。
紀子　そっかあ。

やや沈黙。

禎一　なんかさあ。
紀子　うん。
禎一　現実感がない。成人とか、就職とか、大人とか社会人とか。

紀子　うん。

禎一　ずっと、このままなんとなく同じ生活が続くんだって思ってた。そんなわけないのにな。

紀子　（首を横に振って）禎一くんの言いたいこと、わかるよ。

禎一　ずっとさあ、適当に、ゲームして授業行って課題やって、変わり映えしない同じような毎日を繰り返してて、この先に幸せってあんのかな。って、最近思ってる。俺、ちっちゃい頃とか、将来の夢、なんて言ってたかなって。いつからそういう夢見なくなったんだろうって。いつから適当でいいやって思うようになったんだろうって。

紀子　いいんじゃない？　それでも。

禎一　なんで？

紀子　私は、今が幸せ。いつも、その時その時の「今」が一番幸せ。こんな日がずっと続けばいいなって思ってる。今が幸せなら、今をずっと続けてても、地続きで幸せになれるんじゃない？

禎一　……俺は、「ずっと」って言葉、結構怖いと思うけど。

紀子　どうして？

禎一　どうしてって……。

紀子　禎一くんはさ、ずっとがいいって思わない？　みんなと出会って、私と出会って、一緒に遊んで、一緒に暮らして、この生活がずっと続けばいいのにっ

て、思わない？

禎一　……。

禎一、ふい、と紀子から顔をそらす。

紀子　ねえ、禎一くん。私たち、ずっと一緒にいれたらいいね。

禎一　……そう？

紀子　そうじゃない？

禎一　……そうだね。

紀子　えへへ。

【第六場】

数日後。
禎一、ソファにぐでっと座ってゲームをしている。
紀子、禎一の隣に座っている。
舞衣、ソファの前のローテーブルの脇に座り、紀子にスマホの画面を見せている。

舞衣　ねえ見て。これ。すごくない？
紀子　わあ、すご～い。いいねいっぱいだねえ。
舞衣　やっぱ蘭最高。ツーショ上げたらいいねも拡散もものすんごいんだから。バズり必至。あの子もＳＮＳやればいいのにね。あー、でもそしたら私のライバルどころか殿上人になりそうだからいいや。私のフォロワー獲得を手伝ってくれるくらいが一番いいね。
紀子　フォロワーさん何人になったの？
舞衣　んー？　今ねえ……え、嘘、減ってる。こないだ一万いったのに。えーなんで？　こんなバズってんのに？

舞衣、スマホの画面に集中する。

ゲームの敗北音が響く。

紀子　えっ、負けちゃったの？

禎一　んー。今日駄目だわ。

紀子　今日勝ってるの見てない。調子悪い？

舞衣　（顔を上げずに）やりすぎなんでしょ。

禎一　かもな。

と言いつつ、禎一、次のラウンドを始める。

舞衣　ゲームしかやることないわけ？

禎一　ＳＮＳ漁るしかやることないわけ？

舞衣　うざっ。

禎一　どっちが。

紀子　も～、二人とも。

禎一　……ごめん。

舞衣　いいよ別に。こちらこそ、ね。……うわっ、何これ。

紀子　どうしたの？

舞衣　なんか粘着されてる。意味わかんない。言いがかりすぎ。はいブロックー。

紀子　大変だね。よくわかんないけど。
舞衣　はあ？　嫉妬とか見苦しいんだけど。はー、どうしてやろうかなあ。
紀子　あんまり喧嘩しちゃだめだよ。
舞衣　しないよー。誹謗中傷する隙見せた方が負けなんだから。これも有名税ってやつ？　言うほど有名じゃないけど。
紀子　ファンの人増えるといいね。
舞衣　最近マンネリ気味なのは確か。蘭に頼らないと投稿そんなに伸びないのは癪だよ。
紀子　んー……。私にもお手伝いできたらいいんだけど。
舞衣　ありがと。紀子は遊び行ったら頼まなくても一緒に写ってくれるから好きだよ。かわいいの相乗効果。
紀子　えへへ。また遊びに行こうね。面白くてかわいいとこ行ったらフォロワーさん増えるかな？
舞衣　ちょっと考えるかー。
紀子　旅行とか行きたいね。
舞衣　あり。
紀子　せっかくだし、みんなで。
禎一　みんなって俺らも？
紀子　うん！

禎一　んー……。まあいいか……。
舞衣　別に乗り気じゃないなら無理にとは言いませんけど？
禎一　そういうことじゃなくて。普通にさあ、遠出するのとか、普段と違うことすんの、エネルギー使うじゃん。
舞衣　そういうことじゃん。
禎一　違うって。

玄関扉が乱暴に開閉する音。
透真、どたばたと騒々しく下手から登場。

透真　な～～～～～聞いて～～～～～～～～
紀子　あ、透真くんおかえりー。
透真　ただいまーじゃなくてさあ。
舞衣　何？　振り込め詐欺にでもあったの？
透真　似たようなもん。マジありえん。許せん。助けてほしい。

ゲームの敗北音。
禎一、コントローラーをソファの上に放り投げる。

禎一　あーもうマジで駄目だ今日。終わり。
透真　おい人が助け求めてるとこに割り込むなお前。
禎一　悪い悪い。じゃあ本腰入れて聞いてやるよ。何？
透真　マジ一生のお願いなんだけど、金貸して。
禎一　解散。（立ち上がる）
透真　（禎一に縋りつく）いやマジで！　それか今月分の生活費免除して！　マジやべえんだって！
紀子　何があったの？
透真　裏切られた。
禎一　（座る）穏やかじゃないな。
透真　俺のバ先の店長がさ。あ、居酒屋の方の。あいつ元から給料の管理雑ではあったんだけどさ。手渡しでいつ給料日か決まってない感じの。
紀子　よく言ってたね、それ。
舞衣　辞めれば良かったのに。
透真　だって時給いいんだもんよ。でさ、先月からぶっ倒れて入院するっつってたの。で、バイトリーダーとか俺らで店どうにかこうにか回してたわけ。やれって言うから。時給上げるっつうから。で、色々トラブってはいたんだけど、まあなんとかやってたわけ。これまで。
紀子　そういえばそんな話してたね。

透真　でさ、復活したら給料渡すって言ってたの元々。今二か月分給料未払いなの。それがさあ、今日店長復活してたの。だから給料もらえっかなって思って聞いてみたの。そしたらさ、あいつなんて言ったと思う！？

禎一　なんてって。

舞衣　払えないって言われたの？

透真　「こないだまで入院してたんだからそんなもん用意できてるわけないだろ」って！　給料出すのに来月まで待てっつーの！　ありえんだろマジで！　マジありえんからバイト仲間で訴えようぜってなってんの今。でもそれはさておき今月マジでやばいんだよ。先月から給料未払いでやばかったのに、今月まで出なかったらもう俺生きて行けねえよ。死。終わり。

禎一　でもその分来月入るんだろ。別に待ってやるから来月二か月分払えよ。

透真　あのクソ野郎の言うことこれ以上信用できるか！　最悪ずっと未払いだよ！　あーマジ最悪！　こんなことになる前に辞めときゃよかった！　クソバイト！

禎一　今からでも辞めれば？

透真　今辞めたら絶対給料バックレられるじゃん！　許さん！　勝つまでやる！

禎一　お前、そんなこと言ってるからこんなことになるんだよ。そんな綱渡りでよく平気だな。俺ならとっくに別のとこ探してるわ。

透真　うるせー！　お前みたいに親からの仕送りでのほほんと生きてる奴にとやかく言われたくねえよ！

禎一　助けてやんねえぞ。
透真　すいませんでしたマジ助けてくださいお願いします。
紀子　とりあえず、払えるようになるまで待ってあげようよ。私がんばるよ。
舞衣　紀子にだけ負担かけさせるわけないじゃん。しょうがないからなんとかするよ。蘭にも話さないとね。
禎一　マジで訴えろよお前。
透真　めんどくせ～～～～なんだよあいつマジで～～～～～許せね～～～～～～～

荒々しく玄関扉を開閉する音。
全員下手の方を見る。
蘭、足早に下手から登場し、脇目も振らずに上手へ向かう。

紀子　あ、蘭ちゃんおかえ――
蘭　（ぴしゃりと）今話しかけないで。

蘭、上手へ退場。部屋のドアが勢いよく閉まる音。
沈黙。

舞衣　……なんか、みんなヤバいね。

紀子　蘭ちゃんどうしたのかなあ……。
禎一　試験かインターンか何か落ちたんじゃね。
紀子　かなあ……。後で様子見に行かなきゃ。
透真　やめとけよ。触らぬ神に祟りなしだろ。
紀子　でも、心配だもん。
舞衣　紀子はほんと天使だねー。八つ当たりされたら慰めてあげる。
紀子　大丈夫だよ舞衣ちゃん。でも、ありがとう。やっぱり旅行とか行きたいね。気分変えたいもん。
透真　行きてえ～～～～～。旅費ねえ～～～～～～～。
禎一　さすがに旅費は出してやらんからな。
透真　ええ～～～～～。

沈黙。
禎一、部屋の中を見回す。舞衣が買った新しい服や、蘭の使用済みの参考書、透真の着古された服などが所狭しと散らばっていることに、今初めて意識が向く。

禎一　……っていうかさ。なんか部屋汚くね。
透真　どうでもよっ。

禎一　どうでもよくはないだろ。
紀子　みんなで片づける？　部屋がきれいになったら気持ちもすっきりするかも！
透真　おーん……。
舞衣　ごめんけど、私クローゼットもういっぱいなんだよね。
禎一　着ない服捨てろよ。
舞衣　着ない服ないもん！
透真　嘘つけ！　断捨離しろ断捨離！
舞衣　だってーーーーー。

全員立ち上がり、ばたばたと争いながら片づけのようなことをする。

禎一　（ぼそりと）……まあ、わかるよ。色々持ってたいよな。ゲームだろうが服だろうが、ずっと同じだと飽きるし。同じゲーム、同じ生活、同じ……

【第七場】

突然の証明変化と共にけたたましいタランテラ。
透真↓踊り手３、舞衣↓踊り手４、紀子↓毒蜘蛛、片づけのような動作がそのまま踊りに変わっていく。物が増えた舞台上で、色々なものにぶつかったり、つまずいたりして、踊りを阻害されながら、それでも踊り続ける。
片づけのなりそこないのように、物を動かし続けるが、それがかえって可動域を狭めており、激しいステップも相まって、踊り手たちと毒蜘蛛はぶつかりがちになる。それでも踊りは止まらない。
禎一↓踊り手１、三人の様子を見ながら、ちょいと物を動かす程度の小さな動作に留めている。周囲の激しさに戸惑うように。
踊り手２、出し抜けに現れ、踊り手１の腕をぐいっと引っ張る。
踊り手１、踊り手２に引っ張られよろける。
踊り手２、３、４、タランテラのステップを踏む。荒々しく、どこか雑に、捨て鉢に。
毒蜘蛛、舞台後方で立ち止まり、踊り手たちの様子を見ながら

毒蜘蛛　踊り続けないと。毒を抜くために。踊り続けて。死にたくないなら。楽しいでしょ？　幸せでしょ？　ほら、踊って。

踊り手１　……。

毒蜘蛛　踊って。

毒蜘蛛、他の踊り手たちの方へ向け、ドンッと踊り手１の背中を押す。
踊り手１、首を傾げつつぎこちなく踊り始める。が、すぐにふらついて動きを止める。
毒蜘蛛、パンパンと手を叩く。
踊り手２、３、４、踊り手１を取り囲み、手を取り足を取り踊らせる。逃げようとする踊り手１。追いかけるその他の踊り手たち。
毒蜘蛛は踊り手たちの様子を後ろからじっと見つめている。

踊り手２　踊ろう。

踊り手３　踊ろう。

踊り手４　踊ろう。

踊り手２　踊って。

踊り手３　踊って。

踊り手４　踊って。

踊り手２　踊って。

踊り手３　踊って。

踊り手4　踊って。
踊り手2　踊れ。
踊り手3　踊れ。
踊り手4　踊れ。
踊り手2、3、4　踊れ。踊れ。踊れ。踊れ。踊れ。踊れ。
踊り手1　踊った方が、死ぬよ。

ぴたり。
踊り手たちが動きを止める。
毒蜘蛛、鋭く手を叩く。
踊り手2、3、4、息がうまくできなくなる。陸に上がった魚のように、口をぱくぱくと開け閉めし、喉を押さえ、それからもがくように踊りを再開する。何かに追い立てられるように。踊り続けなければ、息ができないのである。
毒蜘蛛、踊り手1の肩に手を置く。

毒蜘蛛　踊らないと、死ぬよ。
踊り手1　……。

踊り手ー、喉に手を添える。息は別に苦しくない。
毒蜘蛛↓紀子（十七歳）、踊り手４↓舞衣（十七歳）の手を掴む。

紀子　ねえ、舞衣ちゃん。
舞衣　ん？　どうしたの紀子。
紀子　私ね、ずっと考えてたんだけど。
舞衣　なーに？
紀子　今さ、みんなおんなじ大学目指してるじゃん。
舞衣　そうだね。
紀子　みんな受かったらさ、みんなで大学の近くで一緒に住まない？　みんなで協力して、一緒に暮らすの。毎日一緒に起きて、一緒にご飯食べて、一緒に大学行って、一緒に寝るの。私、みんなと家族みたいになりたい。家族がいる家に、帰ってみたい。
舞衣　……いいね、それ！　みんなには言った？
紀子　ううん、まだ。一緒に言ってくれる？
舞衣　もちろん！　みんなが嫌って言ってもさ、二人でも一緒に住もうね。
紀子　うん。でも、みんな一緒にいてくれたら、もっと嬉しいな。

紀子、舞衣、手を取り合って幼馴染たちの方へ。

踊り手３↓透真（十七歳）、紀子と舞衣から話を聞いて

透真　えっ、マジ？　それめっちゃいいじゃん。俺大学行ったら絶対家出たかったんだよ。親も姉ちゃんもマジうるせえったらねえんだもん。生活費みんなで折半な！

踊り手２↓蘭（十七歳）、三人から話を聞いて

蘭　え……いいけど、でも、なんて言われるかな……うちの親、知ってると思うけど、厳しいから、聞いてみないと……でも、うん、そうね。なんて言われても、みんなと一緒に住みたい、かもね。だって、あなたたちと一緒にいるときだけは、安心して過ごせるから。私のままでいられるから。

紀子、舞衣、透真、蘭、踊り手１↓禎一（十七歳）の元へ。

紀子　ねえ、禎一くん。大学行ったらさ、みんなで一緒に住まない？

禎一　え。……お前らみんな賛成？

紀子、舞衣、透真、蘭、うなずく。

禎一　まあ、いいけど。なんだかんだ、ずっと一緒にいるもんな。

紀子　（禎一の手を取って）ほんと！？　ありがとう！　私すっごく嬉しい！　みんなずっと、ずーっと一緒にいようね！

禎一　……うん。

紀子、禎一と舞衣の手を握る。それを皮切りに、全員輪になり回り始める。

蘭　どうしよう。どうしよう。すごく怒らせちゃった。勝手にしろって。もう知らないって。もう助けてやらないって。私、どうしたらいいの？　これからどうやって生きていけばいいの？

紀子　大丈夫だよ。私たちが一緒にいるから。私たちが助けるから。

透真　やべ～～～～マジ全然金ねえ～～～～～。親だけは絶対頼りたくねえし、バイト増やさなきゃ。わり、あんま遊べねえわ。

紀子　大丈夫だよ。応援してるね。困ったときはいつでも頼ってね。

舞衣　えっ、待って、超楽しい！　もっとみんなに見てもらわなきゃ！　もっと褒めてもらわなきゃ！　こんなに楽しいなら、もっと早く始めたらよかった！

紀子　舞衣ちゃんが楽しそうで私も嬉しいな。いっぱいフォロワーさん増えるといいね。私に手伝えることがあったら、なんでも言ってね。

禎一　……。

紀子　禎一くん。楽しいね。みんなと一緒で嬉しいね。

禎一　あー、うん。そうだな。紀子が楽しいなら、良かったよ。

紀子　えへへ。ありがとう。私、みんなのこと大好き。私の家族。初めて私を見つけてくれた……。ひとりぼっちだった私と、ずっと一緒にいてくれた。嬉しい。嬉しい。嬉しい！　私、今が一番幸せ。みんなと一緒にいられたら、ずーっと幸せだよ。

ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる。
手を繋いだまま、同じ場所を回り続ける。
どんどんスピードが上がり、走るように回り続ける。

禎一　ちょっと、待って。目が回るって。

コーヒーカップのように、回って、回って、回り続けて。
暗転。

【第八場】

電気ケトルのお湯が沸騰し、カチッとスイッチが切れる音。
明転。
禎一、電気ケトルからお湯をカップ麺の容器に注ぐ。箸を蓋に置いて、ちらりとスマホの画面に表示された時計を見て、ソファに戻り、座る。
禎一、手持ち無沙汰な様子でリモコンを手に取り、テレビをつける。何度かチャンネルを変えるが、電源を切る。ゲームのコントローラーを持ち、しかしちらりとカップ麺を見て、下ろす。

禎一　……三分待ってる間が一番虚無だよな……。十五分くらい待たせるか、三秒で出来ればいいのに。

禎一、スマホをいじる。
禎一、ふと顔を上げて

禎一　カップ麺食って……ゲームして……大学行って……食って……ゲームして……寝て……

出し抜けに、乱暴に玄関扉を開閉する音がする。
禎一、下手の奥に視線を向け、肩をすくめつつ顔をしかめ、音を立てないようにそろそろと立ち上がり、カップ麺を持ち、上手に退場。

蘭、下手から登場。図書館帰りで、資格取得のための参考書やノート、パソコン等の入った大きな鞄を持って入ってくる。息を吐きながら、荷物を床に下ろしソファに座り込む。ちらりと電気ケトルの方を見て、また視線を落とす。
出し抜けに、スマホの着信音が鳴る。
蘭、スマホの画面を見て、弾かれたように立ち上がりスマホを耳に当てる。

蘭　もしもし。……はい、そうです。……はい……はい……ああ……承知いたしました。ご検討いただきありがとうございました……。はい……ありがとうございます……失礼いたします……。

蘭、通話を切り、

蘭　はあー……。

と、ソファに身を投げ出す。スマホを持った手がずるりと下に落ち、スマホがゴトッと音を立て床に落ちる。
蘭、スマホを拾うことなく、ずるずると座り直し、両手で目元を覆う。

蘭　最悪……ほんと……見る目なさすぎ……。

舞衣、上手から歩いて登場しながら

舞衣　ほーんと、どいつもこいつも見る目なさすぎ。

蘭、顔を上げる。

蘭　……何？
舞衣　おつかれ。インターン落ちたの？
蘭　……舞衣こそ、フォロワー減ったりでもしたの？
舞衣　そう！　ねえ聞いて。

舞衣、蘭の返事を待たず、蘭の隣に座りスマホの画面を見せる。

舞衣　この子。どう思う？

蘭　……どうって？　かわいいわね。

舞衣　私とどっちがかわいい？

蘭　……知らない。興味ない。

舞衣　顔は知らないけどさ、絶対さ、中身に関してはこの子の方がかわいくないよ。いちいちマウントとってくんの。わざわざ空リプしてさ。ねえ、これ絶対私のことだと思わない？　フォロワーがたかだか四百人ばかり多いくらいでそんなに偉い？　なんでこんな擁護されてんの？　意味わかんなくない？

蘭　……そうね。

舞衣　しかもさあ。ウザいのがこの子の信者でさ。いちいち私の投稿に粘着してくんの。ほらこれ。ねえ見て。

蘭　……何これ。

舞衣　「あの超絶美人はもう出ないの？　正直あなたよりあの子の方が見たいんですけど。選手交代したら？」だってさ！　ありえなくない？　これ私のアカウントなんだけど。

蘭　ねえ、この「超絶美人」って、まさか私のことじゃないわよね？

舞衣　そのまさかだよー。画像見たらわかるじゃん？

蘭、深々と溜め息を吐く。

蘭　だから顔全部隠してって言ったのに。
舞衣　えー、でもさ、美人なのは事実じゃん？　蘭と写ってるのが結局一番伸びるんだよ。
蘭　デジタルタトゥー同然なんだけど。
舞衣　ねえ、蘭……
蘭　駄目。
舞衣　まだ何も言ってないじゃーん。
蘭　もう出ない。私今大事な時期なの。無駄なことに時間費やしたくないの。
舞衣　言い方キツくない？　私にとっては無駄じゃないんだけど。
蘭　あなたにとって大事なことと、私にとって大事なことが違うのは当然のことじゃない。
舞衣　あーあ、もったいない。フォロワー一万人って、簡単なことじゃないんだよ。少しは幼馴染に協力しようって思わない？　蘭の顔役に立つんだからさ。
蘭　……私の顔はあなたの承認欲求のための道具じゃないんだけど。
舞衣　そんなことわかってるよー。だからもったいないんじゃん。
蘭　わかってないわね。
舞衣　せっかく生まれ持ったもの、うまく活かした方が絶対いいと思うけど。蘭はビジュアルの使い方が下手なんだよ。だから裏目にしか出ないの。

蘭　……別に望んでこの顔に生まれたわけじゃないんだけど。私がなまじ顔がいいとされているせいで、これまでどんな目に遭ってきたか、知ってるくせに。

舞衣　別にさあ、告白をゲーム扱いされたのだって、変な男に絡まれたりストーカーされたりしたのだってさ、顔だけのせいじゃないじゃん？　蘭の態度は問題だったと思うよ。友達だからこそ言うけど。

蘭　余計なお世話。好きでもない人に思わせぶりに接して何になるの？

舞衣　そんなんだから「高嶺の花」とか言われて玩具にされるんだよ。

蘭　舞衣、やめて。

舞衣　容姿なんて選べないんだからさ。どうせならうまく使えばいいのに。そしたら就活もすぐでしょ？

蘭　顔採用なんか願い下げ。わかってるくせに。

舞衣　じゃあ交換してよ。私と顔交換して。

蘭　意味不明なこと言わないで。

舞衣　だって蘭はそういう目で見られたくないんでしょ。私は見られたい。……それとも、結局蘭も顔の良さに胡坐かいてるわけ？

蘭　舞衣。

舞衣　得してきたじゃん。その顔でこれまで。面倒なことしか覚えてないかもしれないけど。蘭にはどうでもいいことかもしれないけど。蘭が意識してないだけで、その顔だからギリギリ許されてきたことがたくさんあるじゃん。昔っか

らそう。別に完璧じゃないのに、蘭だって色々問題があるのに、その顔だから許されてきたじゃん。好き勝手できたじゃん。

蘭、無言で立ち上がり、まだ湯気が出ている電気ケトルの方へ向かう。

舞衣、それを追いかけながら

舞衣　その見た目だから、その傍若無人が完璧主義っぽく見えてただけだよ。そのくせ「望んでこの顔に生まれたわけじゃない」とかさ、私からしたら何言ってんの？　って感じなんだけど。ないものねだりを自覚しなよ。一人だけ何もかも全部わかって悟ってる風にしないでよ。私だって苦労してんだよ。私だけじゃない、みんな色々頑張ってんだよ。

蘭　黙って。

舞衣、ケトルを持つ蘭の手元に触れる。取っ組み合うほどではないが、舞衣の手が不意に蘭の肘を押す。

蘭、バランスを崩して転倒しかける。

暗転。盛大な水音。

舞衣　――っっッあああああああああっ！！

沈黙。

蘭　……は？

沈黙。

救急車のサイレン。どたばたと複数の足音。

沈黙。

【第九場】

数日後、リビングにて。
禎一、ソファに座り、ゲームのコントローラーをガチャガチャ操作している。力が入っているのはコントローラーを操作する指のみであり、慣れ切った脱力感でソファにもたれかかって斜めにゲーム画面を見ている。
格闘ゲームの音だけが空虚に響いている。

透真、荒々しい足音と共にリビングにやってくる。

透真　お前さあ、こんなときによくゲームなんかできるよな。
禎一　（手を止めることなく）何？
透真　心配じゃねえの？　舞衣のこと。
禎一　舞衣のことを心配するのとゲームしないことに何の関係があんの？
透真　やばお前。人の心とかないんか。
禎一　金の亡者に言われたくない台詞第一位。
透真　今そういう話じゃねえだろ。
禎一　お前の方こそ、今日バイトじゃねえのかよ。行かなくていいのかよ。
透真　お前ほんとに人の心ないんだな。

禎一　お前が今ここにいたってしょうがないじゃん。どうせなら紀子についてけば良かったのに。

透真　……しょうがねえじゃん。当の舞衣が来んなって言うんだから。

禎一　じゃあバイト行けば良かったのに。

透真　そんな気になんねえよ。あいつも部屋から出てこないし。おかしいの、絶対お前の方だから。

禎一　知らねえよ。

透真、盛大な溜め息を吐く。苛々とした足取りで部屋の中を歩き回り、しきりにスマホを見たりポケットにしまったりとせわしなく動き回る。

禎一、完全に無視してゲームに戻る。

勝利音が響く。

次のラウンドが始まる。

透真、盛大に怒りを滲ませた溜め息を吐く。

ゲームの音だけが空虚に響いている。

玄関の扉が開閉する音が響く。

透真、弾かれたように下手の方を見る。

紀子、舞衣を抱きかかえるようにしてリビングに入ってくる。

紀子　ね、舞衣ちゃん、座ろ。大丈夫だから。ね。

舞衣　……。

紀子、舞衣をソファの方まで連れてくる。

紀子　……禎一くん。

禎一　……。

禎一、紀子と舞衣の方をちらりと見て、小さく溜め息を吐く。ゲームの電源を落とし、ソファから立ち上がり部屋の隅へ。

紀子、舞衣をソファに座らせ、自分も隣に座る。なだめるように、舞衣の背中を擦る。

舞衣、両手で顔を覆ったまま微動だにしない。手の隙間から覗く顔には痛々しくガーゼが巻かれている。

透真、所在なさげに頭を掻く。

透真　あー……舞衣。大丈夫……なわけねえか。

舞衣、聞こえるか聞こえないか微妙な、小さな掠れ声で

舞衣　……うるさい……

紀子　うるさいって。

透真　（紀子に）医者、なんだって？

紀子　全治四か月だって。でも治るよ。

舞衣　さいあく……。もう、終わり。

紀子　終わりじゃないよ舞衣ちゃん。ちゃんと治るよ。

舞衣　終わり、だよ……！　げほっげほっ

紀子　大声出しちゃだめだよ舞衣ちゃん。

舞衣　跡、残っちゃうじゃん。もう、戻れないじゃん。跡、消したら、整形ってことに、なっちゃうじゃん。事情話しても、せいぜい、かわいそうな子、になっちゃうじゃん。そんなの、いらないのに。そんな属性、ノイズになる、だけなのに。わたし、ただ、普通の、普通に、かわいい子でいたかったのに。

舞衣、力なく咳き込む。紀子、舞衣の背中をしきりに擦る。

紀子　わかったよ、わかったから、あんま喋んない方がいいよ。もっと痛めちゃうよ。

舞衣のすすり泣く声。

舞衣　さいあく。さい、あく……。

紀子　大丈夫だよ。舞衣ちゃんはかわいいよ。ちゃんと、普通に、かわいいよ。

舞衣　……ちがう。違う……さいあく……。

紀子　違わないよ。最悪じゃないよ。大丈夫だよ。今までだってこれからだって、舞衣ちゃんはずっとかわいいよ。（顔を上げて）ね。

透真　……おう。そだな。

透真、舞衣の前で腰を下ろす。舞衣の顔を覗き込もうとするが、舞衣に緩やかに拒否されて諦める。が、場所は移動せず

透真　どんなもんかわかんないけどさ。最近の医学って優秀だろ。それにたかが熱湯じゃん。火事で逃げ遅れたとかじゃないじゃん。治るだろ。跡だってちゃんと消してくれるって。それに今時、自撮り写真もいくらでも加工できんだろ？　知らんけど。別にお前のやりたいことは問題なく続けられるって。そんな落ち込むなよ。元気出せよ。お前が元気ないと調子狂うんだよ。（紀子に）なあ。

紀子　うん。舞衣ちゃんは笑顔が一番かわいいよ。今は痛いかもしれないけど……。

舞衣　……。

舞衣、反応せずすすり泣いている。

透真、禎一の方を見る。お前も何か言えよ。目と手で訴えかける。

禎一、小さく息を吐いて顔を背ける。

透真、舌打ち。禎一の方へ近づく。

透真　（少し声を落として）お前さ、マジでふざけんなよ。

禎一　お前こそ適当言ってんじゃねえぞ。そんな雑なきれいごと言われたって余計みじめになるだけだろ。ほっといてやれよ。

透真　お前それでも友達かよ。

禎一　だから、何も共感してやれないのに適当なこと言うよりましって言ってんの。

透真　やばお前。共感してやれないとか。舞衣が自分の見た目どれほど大事にしてるか見てればわかるだろ。

禎一　お前は自分の見た目そんなに大事じゃねえじゃん。舞衣の気持ちわかったふりしてんじゃねえよ。気持ち悪い。

透真　あぁ？

紀子　二人とも。喧嘩しないで。どっちも間違ってないと思うよ、私は。

透真　でもさあ、

バン！と、蘭が壁を叩く音が透真の言葉を遮る。
壁を叩くと同時に上手から現れた蘭、ぎろりと舞衣を睨みつける。

蘭　……鬱陶しいんだけど。

紀子　蘭ちゃん……。

舞衣、びくりと体を震わせる。
蘭、それを見て苦々し気に舌打ちをする。

蘭　被害者のつもり？　引くわ。

紀子　蘭ちゃん、舞衣ちゃんは被害者だよ。

蘭　事故よ。舞衣が勝手に追いかけてきて、勝手に押してきて、勝手に火傷したの。それなのに私が加害者？　ふざけないで。あんたのせいで、私が「そういう人」に見られたらどうしてくれるの。私の就活の、人生の邪魔したくせに、なんでそんな態度取れるわけ？　私がどこにも就職できなかったら、あんたが責任とってくれるわけ？

透真　蘭！

蘭　あー……最悪。ほんと最悪。最悪なのはこっちよ。

透真　蘭、確かにお前は悪くないよ。悪くないけど、その言い方はないだろ。実際大火傷してんだぞ、舞衣は。舞衣がお前の人生の責任取らないといけないなら、お前は舞衣の怪我の責任取れんのかよ。

蘭　だから治療費出してやってるでしょ。別に跡消したいなら消せばいいじゃない。誰も反対してない。

透真　そういう問題じゃないってよ。

禎一　お前さっきから言ってることめちゃくちゃだけど。写真なんていくらでも加工できるって言った舌の根も乾かないうちにそれかよ。

透真　お前は黙ってろよ。そんな冷徹なことしか言えないなら。

蘭　もう嫌。本当に最悪。こんなことなら最初から一人暮らししてればよかった。

透真　は？

紀子　（間髪入れずに重ねて）蘭ちゃん。それはだめだよ。それは違う。過去の蘭ちゃんの選択をないがしろにしちゃだめ。

蘭　何それ。あなたが発案者だから、そんなこと言ってるだけでしょ。そもそもあなたがシェアハウスしようとか言ったから、全部がおかしくなったのよ。

紀子　……思ってなかったくせに。そんなこと、私たちと一緒に住むって決めたときは、全然思ってなかったくせに。だからお父さんお母さんと喧嘩してまでここに来たんでしょ。私は強制してない。誘っただけ。一緒に住むって決めて

くれたのは蘭ちゃん自身でしょ。

蘭　だから責任を追及するなって？　じゃあ私は？　シェアハウスするって決めたのが私の勝手なら、火傷したのも舞衣の勝手でしょ。舞衣の被害者面は許されてどうして私は許されないわけ？　矛盾でしょ、それは。

沈黙。

舞衣のすすり泣きだけが響く。

蘭　はー……最悪。

蘭、足を引きずるように上手に去ろうとする。

禎一　出てくの？

蘭、透真、紀子、勢いよく禎一の方を振り返る。

蘭　何？

禎一　そんなに嫌なら、ここ出てくの？

透真　はあ！？

蘭　……。

蘭、何か言葉を発しようとして、喉が詰まる。

紀子　禎一くん、なんでそんなこと言うの？

禎一　いや、そこまで言うなら「もう出てく」とか言うのかと思ったけど、それはないんだと思って。

透真　（重々しく息を吐きながら）お前さあ……。

禎一　シェアハウス解消したくないのはお前の意見じゃん？　じゃなくて俺は今蘭の意思を知りたいだけだから。最近ずっと俺らと生活被らないようにしてたし。蘭はここにいたくないのかと思ってたけど。

蘭　……出てけってこと？

禎一　そうは言ってない。

蘭　私が今どういう状況にいるかわかってて言ってる？　だとしたら最低なんだけど。

禎一　何が？

蘭　～～～っ、行くとこなんかないって言ってんの！　いちいち言わせないで！

禎一　そうか？

蘭　そうよ！　誰かさんのせいで頼れる人もいない！　家探しだの引っ越しだのやって

る暇もない！　どれだけ嫌でもあと二年はここにいないといけないの！

禎一　嫌ではあるんだ。

蘭　うるさい！　出てくの、ですって？　出ていくわよ！　絶対あなたたちなんかじゃ逆立ちしたって入れない会社に入って、高跳びしてやるんだから！

紀子　……入れるといいね。

蘭　……どういう意味か聞くのも面倒だわ。もういい。時間の無駄。

蘭、全員を一瞥し、わざとらしくしかめた顔を背け、荒々しく上手に退場。

透真、禎一を睨みつける。

透真　お前、余計なこと言う天才？

禎一　お前にとってはそうかもな。

透真　やば、お前。

禎一　馬鹿だな。蘭。

透真　は？

禎一　別に、出ていこうと思えばいつだって出ていけるだろうに。出ていきたいならば出ていけばいいのに。結局出ていくつもりないってことだよあれは。ずっとこれまで通りやっていくんだよ。今動かないってことはそういうことだ。

透真　……。

透真、ゆっくりと禎一の方へ迫る。

透真　お前、それ、どういうつもりで言ってるか、自分でわかって言ってんだろうな。

禎一　わかってるよ。

透真　空気読まないにも限度があるだろ。

禎一　お前も、「出ていけるもんなら出ていきたい」とか思ってるタイプ？

透真　禎一！！

透真、禎一に掴みかかる。

禎一、大して抵抗せず壁に体を打ち付けられる。

禎一　お前の言い訳は金だろ。お前なら、三か月も遊ぶの我慢して普通にこれまで通り稼いだら、引っ越し代くらい余裕で稼げるくせに。引っ越し手伝ってくれる友達だって、どうせ声かければいるんだろ。そこまでわかってて、それでもここにいるんだ？

透真　……そんなに俺らといたくないなら、お前が出てけば？

禎一　そういう話してんじゃなくて。嘘吐くなっつってんの。出ていきたいなら出て

いけばいいだろ。ここにいるつもりなら「出ていきたい」なんて思わなきゃいいだろ。どっちかにしろよ。中途半端。

紀子　……ひどいよ、禎一くん。なんでそういうこと言うの？　出ていくとか出ていかないとか、そんな話しないでよ。みんな色々考えてるんだよ。みんな色々考えて、それでもここにいてくれてるんでしょ？　その気持ちをないがしろにしないで。

紀子、立ち上がり、禎一と透真に近づく。透真の手をそっと取る。

紀子　透真くんも。禎一くんに乱暴しちゃだめ。ここを本当に出ていきたい人なんて、ここにいないでしょ？　ずっと一緒にいるって言ったもん。だからみんな、ここにいてくれてるんでしょ？

沈黙。

紀子　ずっとここにいればいいよ。私たち、ほとんど家族みたいなものなんだから。喧嘩くらいするよ。出てくって言いたくなるときもあるよ。でも、それでも、いつかは仲直りして、それでずっと一緒にいるものでしょ？　約束したんだから。一緒にいてくれるって。約束は守ってくれなきゃ。

紀子、ソファに戻り、舞衣の傍らに座り直す。

紀子　大丈夫だよ、舞衣ちゃん。舞衣ちゃんが元気になるまで、私、精一杯支えるからね。

舞衣　……どうすればいいの？　……。私、もうわかんない。

舞衣、ゆっくりと、ふらつきつつ、立ち上がる。上手に立ち去りかけ、足を止め、たじろぎ、躊躇い、足早に下手に小走りで去っていく。

紀子　舞衣ちゃん！？　どこ行くの！？

紀子、弾かれたように立ち上がり、下手に駆けていく。

玄関扉が開閉する音。

透真　……ああ、そうだよ。言い訳だよ。だってさ、めんどくせえじゃん。変えなくたって生きていけることを変えるのは。めんどくせえことのために、今やりたいこと我慢すんのはおかしいじゃん。何が悪いんだよ。選択してんだよ。嫌々ながらでも、そっちを選んでんの。言わないとわかんない？　お前そんな

奴じゃなかったよ。適当だけど、人の心はあっただろ。何がお前をそうしちまったんだよ。気色悪いのはお前の方な。

透真、上手に立ち去る。

やや沈黙。

禎一、おもむろに立ち上がり、ソファの方へ。置いてあったゲームのコントローラーを手に取り、眺める。

禎一　約束とか……何の話してんだよ。自分の人生より、した覚えもない幼馴染との約束が、そんなに大事？　幸せでもなんでもない今の生活を続けるのが、そんなに楽？　……このまま、同じ場所で、同じ生活を続けて、その先に、幸せなんか。

禎一、ゲームのコントローラーを持ったまま、上手に退場。

暗転。

【第十場】

タランテラのメロディが、緩慢なテンポでかろうじて流れている。
明転。
踊り手２、３、４、ふらつきながら、一応タランテラのステップに則ってい
そうな、何かしらのステップを踏もうともがいている。
踊り手１、舞台中奥で、それを眺め立ち尽くしている。
毒蜘蛛、踊り手１の背後から現れ、踊り手１を踊らせようと手拍子。
踊り手１、無反応。
毒蜘蛛、踊り手１の腕を引っ張り、舞台前方に連れて行こうとする。
踊り手１、毒蜘蛛の手を乱暴に振り払う。
毒蜘蛛、なおも諦めず踊り手１を踊りに誘い続ける。
踊り手３、何もない床に躓き転ぶ。
毒蜘蛛、踊り手３の側に駆け寄り、手を引き、立ち上がらせる。
踊り手３、毒蜘蛛に引きずられるように踊り続ける。
踊り手２、踊り手４の進行方向に立ちふさがってしまう。意図的ではない。
踊り手４、踊り手２の肩を掴み、頬に平手打ちをする。
踊り手２、倒れ伏す。が、すぐに起き上がり、踊り手４と取っ組み合いを始
める。非常に無様である。

毒蜘蛛、反射的に踊り手２、４の方へ向かい、引き離そうとする。
踊り手２、４、毒蜘蛛の干渉によりかろうじて踊りの体を取り戻すものの、相変わらず小競り合いを続ける。もはやその動きはタランテラからは程遠く、好意的に見て、そういう創作舞踊に見える。
支えをなくした踊り手３、もう一度躓いて倒れ伏す。
毒蜘蛛、誰をどう操れば良いか迷い、舞台上を行ったり来たりを繰り返す。
踊り手１→禎一、深く盛大な溜め息、吐き捨てるように。

禎一　何やってんの？　本当に、ずっと、何やってんの？

毒蜘蛛、禎一を振り返る。

毒蜘蛛　踊らないと。踊り続けないと。動き続けないと。死んじゃう。みんな死んじゃうよ。君も死んじゃうよ。踊らないと。死にたくないよね？

禎一　死なないよ。ずっとおんなじところでどたばたと、おんなじ動きを繰り返して。お前の毒は、人を殺せない。そんな大層な毒じゃない。それに、踊ったって、そう簡単に毒が抜けるわけないだろ。馬鹿馬鹿しい。

毒蜘蛛　踊ってよ。ずっと、同じ踊りを。踊り続けて。私と一緒に。

禎一　踊らない。こんな舞台、願い下げだ。ずっとおんなじ場所で踊り狂っていたっ

て、俺は、俺たちは、幸せになんかなれないんだから。

毒蜘蛛　なれるよ。ずっとここで、ずっと一緒に、踊っていようよ。楽しいよ。だって、楽しいときはみんないつも踊っていたでしょう？

禎一　踊りたくないのに踊ったって、疲れるだけだろ。

踊り手2、3、4、動きを止める。常識外のことを言われたような、珍獣を見る目で禎一を見る。

毒蜘蛛、動きを止めた踊り手たちを見て、小さく悲鳴を上げる。

毒蜘蛛　だめ。踊って。踊らないと。みんな、踊らないと。死んじゃう。死んじゃうよ。私のせいで、みんな死んじゃう。

禎一　俺は踊らない。変わらないと。幸せになるためには。

毒蜘蛛↓紀子、その場に座り込む。

紀子、ずるずると禎一の方ににじり寄り、縋りつく。

紀子　だって、私はこれが幸せなのに。みんなとずっと一緒に、ずっと同じ場所で、ずっと同じ生活を繰り返すのが。みんなだけが、私を見つけてくれたのに。みんなだけが、私と踊ってくれたのに。私の居場所はここにしかないのに。

禎一　そんなこと、知らない。

紀子　……やだ。やだ、やだ、嫌だよ。やめて。

禎一　俺は、ここを出ていく。

禎一の言葉がやけに響く。

紀子、息を飲み固まる。

禎一　ここで同じ生活を繰り返しても、何も見えないなら、幸せになれる未来が見えないなら、ぐるぐる回って目を回すくらいなら、ここを出ていくことが、唯一の正解だ。

紀子　……。嫌、そんなの嫌、絶対いや、なんで？　どうしてそんなこと言うの？　ここにいてよ。一緒にいてよ。私のこと好きでしょ？　好きな人と一緒にいるのが一番幸せでしょ？

禎一　……はっ。残念だったな。俺を引き留める言葉が、それしかなくて。

紀子　……。

禎一　見ろよ。

禎一、踊り手2、3、4↓舞衣、透真、蘭の方を一人一人指さす。

禎一　生きがいを失って、何にも身動きが取れなくなった奴。ここを出ていく手段がない奴。他に行くあてがどこにもない奴。嬉しいか？　こんな風にでも、自分の方が選ばれて。どこからがお前の意思だ？　どこまで狙ってた？

紀子　そんな。狙ってなんか……。

禎一　でも、俺にはなかった。人生をかけるほど大切なものも、絶対に失いたくないものも。有り体に言えば弱みがなかった。だから、自分を楔にするしかなかった。俺がお前から離れていかない理由を、お前自身にしてしまえば、それが一番楽で強い理由だから。……でもさ。正直、俺は他の誰よりも、俺が一番大事だよ。人助けとか、人を愛するとか、そういうのは、自分に余裕がある人間がする贅沢だ。みんな、まずは自分のために動くべきなんだよ。お前だってそうだろ？　みんなの大切にしているものをないがしろにして、自分の思い通りにここに縛り付けて満足なんだろ？　俺は、お前に縛られる気はない。だから出ていく。まずは自分が幸せになるために。……まあ、俺が幸せになれたときには、余裕があればお前らに手を差し伸べてやらんこともないけど。（幼馴染たちを、一人ひとり鋭い眼光で射貫くように見て）それまで、お前らが死んでなければな。

紀子、力なく、しかししきりに、首を横に振る。

少しの沈黙。

透真　……ふざけんな。ふざけんなよ。許さねえぞ、お前だけここを出ていくなんて。俺たちが、今、どんな思いしてると思ってんだよ。一番苦しんでないお前が、一番楽してるお前が、一番適当に生きてるお前が、一人でさっさと逃げ出すなんて、許すわけがないだろ！

禎一　お前らだって、自分で決めたんだろ。ここで踊り続けるって。俺みたいに、途中で踊るのをやめることだってできたのに。やめられないところまで続けてきたのは、お前らの選択だろ。俺が今、苦しんでないのは、楽してるのは、適当にやっていけるのは、俺の選択の結果だ。自分が身動き取れないことを、俺のせいにするな。

舞衣　……ずるい。そんなこと、わかって、たら、私、だって、こんなこと、なる前に……。

蘭　だって、誰も教えてくれなかった。こんなことになるなんて、どこにも行けなくなるなんて、誰も。私は正しかった。ずっと正しい選択をし続けていたのに。ずっと、正しいって言われてる道を、選び続けていたのに。どうして？　どうして、どこにも行くところがないの？

禎一　……はあ。

禎一、座り込んでいる幼馴染たちの中央に進み、腰を落とす。

禎一　一つだけ助言してやるよ。お前らは今、踊り疲れて目が回ってるだけ。何も見えてないだけ。少し落ち着いて周りを見れば、簡単に動けるはずだよ。俺みたいに。

紀子　……だめ。そんなの、だめ。許さない。絶対に。許さない。

禎一　勝手にしろよ。じゃあな。

禎一、立ち上がる。

紀子↓毒蜘蛛、声の限りに叫ぶ。

毒蜘蛛　駄目！！！！！！

毒蜘蛛、禎一に向け手を伸ばす。舞衣、透真、蘭↓踊り手２、３、４、立ち上がり、禎一を押さえつけるべく襲い掛かる。

ひどくテンポの速いタランテラがけたたましく流れる。音楽の力で無理やり突き動かされるように、踊り手２、３、４は壊れかけの機械のように駆け回る。

禎一、踊り手たちの手を難なく避け、ひょいと舞台から飛び降りる。そのまま走り去っていく。誰も手が届かないところまで逃げ去り、最後に一言、

禎一　あばよ！

と、姿を消す。
残された踊り手たち、舞台から降りることができず、標的を見失って舞台上をひたすらに踊り回る。
タランテラのリズムが、だんだんと失速していき、テンポ感を失っていく。
ねじが回り切ったオルゴールのように、緩慢になっていく。
それに合わせ、踊り手たちの動きもぎこちなくなっていく。
やがて、完全な静寂と共に、踊り手たちは倒れ伏して動かなくなる。
踊り手たち↓蘭、透真、舞衣、倒れ伏す瞬間に、ぽつりと言葉を残していく。

蘭　……私にはもう、帰る場所も、頼れるものも、どこにもないのに。
透真　あーあ……金が空から降ってくれたら、何もしなくても自由になれるのに。
舞衣　疲れた……もう、何も考えられないよ……。

沈黙。
毒蜘蛛、座り込んだまま、笑うのか泣くのかもあいまいな顔で天を仰ぐ。

毒蜘蛛　……ああ……駄目……死んじゃう……私……わた……次……次を……見つけないと……踊って……踊り続けて……踊り続けないと……私の毒を抜いて……踊り続けて……死にたくないから……。

雨垂れのようなピアノの音が一音ぽんと落ちる。

暗転。

（幕）